

2020年5月6日
麻生ラグビースクール
校長 杉浦輝明

麻生ラグビースクール「あさおマインド」

「あさおマインド」の発行にあたり

私たちのスクールは40年という長い時間、ラグビーというスポーツとラグビーを愛する仲間たちとともに歩んできました。これまで山あり谷ありの歴史があり、麻生ラグビースクールの今があります。これからも「次代を背負う若者づくり」というスローガンのもと、ラグビーというスポーツを楽しむ、触れ合う機会や場を継続していくためにも、改めて麻生ラグビースクールとしての考え方（マインド）をスクールに関わる全ての皆さんと共有していきたいと考えています。

1. スクールスローガン

「次代を背負う若者づくり」

2. 目指すスクール

お互いを認めあい、思いやり、補完しあい、みんなでラグビーを楽しむスクール

3. 目指す若者づくり

- ①お互いの体格や性格、特徴などの違い（個性）を認めあう人間性を育む
- ②礼節を学び気持ちの良いコミュニケーションが取れる人間性を育む
- ③体をぶつけあうことができるラグビーという競技を通し心身を鍛える
- ④困難にあえども仲間と助けあいながら立ち向かえる人間性を育む
- ⑤楽しむ姿勢から物事に主体的に取り組むことのできる人間性を育む

4. コーチ（指導員）マインド

- ①プレイヤーの名前を覚え、彼らの存在を尊重し、指導を行う
- ②基本スキルと同じようにスポーツマンシップ、ラグビーコアバリューを教える
- ③レフリーが見ていなくとも自分でルールやディシプリンを守るフェアプレー精神を理解させる
- ④安全を最優先した指導を行う（プレイヤーの習熟度に合わせて指導を変えること）
- ⑤長所を伸ばす指導を行う（褒めることでスキル向上とスポーツマンシップへの報酬を与える）
- ⑥プレイヤーの意見を聞き、認める、併せて質問を心がけ、プレイヤーが考える機会を作る
- ⑦プレイヤーが将来的に必要なスキルの学習をする時間を勝利のための時間よりも優先する
- ⑧チームの勝利や成長の名のもとにミスしたプレイヤーの尊厳を傷つける言動や場を厳に慎む
- ⑨プレイヤーはプレイヤー自身の喜びのためにプレーしているということを忘れない
- ⑩ワールドラグビー RugbyReady 等を毎年受講し、コーチとしての学びの努力を怠らない
- ⑪プレイヤーをグラウンドで安全に指導するための資格取得を心掛ける

5. プレーヤー（子ども）マインド

- ①グラウンドと用具に感謝して、元気よく挨拶して入場する
- ②どんな時も全力を尽くす
- ③練習してきたことをプレーする
- ④プレー中のミスは仲間を責めるよりも大きな声ではげます、ドンマイ！を
- ⑤自分が扱われたいように他のすべてのプレーヤーを扱う、自分がされて嫌なことはしない
- ⑥チームメイトおよび相手の良いプレーを認め、称え合う、ナイスプレーと声を掛ける
- ⑦決められた時間は守る（集合時間などグラウンド以外での規律も大事にしよう）
- ⑧チームメイト、相手、コーチを尊重し、レフリーの決定に対して決して文句を言わない
- ⑨他の人を喜ばせるためだけでなく、一番は自分自身の楽しみのためにプレーする
- ⑩スポーツマンシップ、ラグビーのコアバリューについて学び、実践する
- ⑪ルールを正しく覚える、競技規則に従ってプレーする
- ⑫分からないところはコーチに質問して聞く

6. 保護者 観客マインド

- ①プレーヤーはプレーヤー自身の喜びのためにプレーしているのであって、保護者や観客の喜びのためでは無いと言うことを決して忘れない
- ②相手に、仲間に、敬意をはらう（相手なくして仲間なくして試合は成り立たない）
- ③プレーヤー、コーチ、レフリーを尊重し、攻撃しない
- ④レフリーの決定を尊重する
- ⑤観客 保護者の立場こそ、チームやチームメイト、そして相手と協力する
- ⑥どちらのチームであっても良いプレーに対して褒める
- ⑦グラウンド内の指導の現場に無断で立ち入らない
- ⑧グラウンドにおいてプレーヤーが混乱する原因をつくらない
- ⑨汚い言葉を使わない
- ⑩力の暴力、言葉の暴力の行使を非難する

7. 保護者（親）コーチマインド

- ①指導の現場に親子関係を持ち込まない
- ②自分の子どもに対して最良することは決してあってはならない
- ③自分の子どもに対して厳しすぎることは健全ではない
- ④他のコーチからの助言や進言を受け止め改めるべきところは改める

8. 幹部・チーフコーチマインド

- ①すべてのプレーヤーが練習や試合に参加するための機会を平等につくり出す
- ②指導や方針はプレーヤーセンタードになっているか、大人の思いになっていないか常に問うこと
- ③ラグビーはプレーに参加するためにあり、コーチのためのスポーツではないことを忘れない
- ④勝負は時の運と心得、大会や試合の前こそ、いま一度自分を冷静に客観視すること

- ⑤練習でも試合でも安全にプレーさせることを最優先とし、無理や無茶はさせないこと
- ⑥練習してきたことを評価できているか、そのプロセスが見たうえで評価できているか問うこと
- ⑦自らのコーチングポリシーが所属するスクールの理念と合っているか、共有できているか、独りよがりになっていないかを問うこと
- ⑧スクールベスト（スクール愛）を考えての判断になっているか、特定の学年に偏っていないかを問うこと
- ⑨コーチおよびレフリーを教育、訓練するための機会をつくり、必要資格取得を支援すること
- ⑩安心して活動に参加してもらえ体制を整え、その運営に責任と喜びを持ってあたること
- ⑪ラグビースクールとして大切なグラスルーツ活動の普及・育成を支えていくこと

※本資料はこれまで私がお伝えしてきたことに日本ラグビーフットボール協会スタートコーチ講習会資料の内容を加味して作成しました。ご不明な点等ありましたらスクール幹部にお問い合わせください。

※2019年5月24日 初版

※2020年5月6日 第2版

(参考) ラグビージャーナリスト 村上 晃一さんからのコメント
「タッチライン際の大人たちへ」

ラグビーは試合になれば選手がすべてを判断してプレーするスポーツです。だからこそ、教育的価値が高いと認められているのです。コーチの仕事は選手が自分達で判断してプレーできるように育て、導くこと。親や観戦者はそれを温かく見守る。それがラグビーです。近年、ラグビー王国ニュージーランドですら、子どもたちの試合での野次や罵声が問題になっています。現状を憂い、「Let Kids Be Kids」というキャンペーンが行われています。子どもは子どもでいさせてあげてほしい。ミスを叱り、レフリーに文句を言うのではなく、その奮闘をサポートし、楽しい思い出を残してあげてほしい。そんな願いが込められています。子どもたちはボールをもって走り、パスし、タックルすることが楽しくて仕方がないのです。仲間と協力して戦い、試合が終われば相手チームと友達になる。それは美しい思い出になります。その記憶の中に、ひどい言葉を刻みつけないでください。子どもたちは大人の態度を見ています。子どもたちの自主性を重んじ、レフリー、相手チーム、両チームのサポーター、すべてをリスペクトしながら、子どもたちをサポートしてください。それがラグビー精神なのですから。

※第9回ヒーローズカップパンフレットより転載